

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370035

研究課題名(和文) 神仏共存世界における人間の「現存」に関する倫理学的研究 『愚管抄』を中心に

研究課題名(英文) Ethical Study on The Existence of Mankind in the World of Co-existential Kami and Buddhas: A Study of the Gukansho and Other Texts

研究代表者

上原 雅文 (UEHARA, Masafumi)

神奈川大学・外国語学部・教授

研究者番号：30330723

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：『愚管抄』の読解に関しては、写本を蒐集した上で、4種類の活字本での本文校合、及び現行の現代語訳の問題点の指摘とその箇所を試訳を分担して行い、思想内容も含めて議論した。その成果の一部は、リポジトリにて公開した。そして、上記の『愚管抄』の読解及び「道理」の分類などによって、『愚管抄』に描かれた神仏共存世界の構造と人間の「現存」との関係の一端を明らかにした。また史料読解と実地調査によって、慈円の生き方と知の様態を考察した。

個別研究では、中世のみならず、近世や古代も含めた様々な神仏関係思想と人間の「現存」の関係の解明に取り組み、研究会で報告して議論を行い、いくつかの成果を公表した。

研究成果の概要(英文)： We commenced our study of Jien's Gukansho by collating four existing typeset editions against manuscript copies, identifying problems in the modern Japanese translations contained in these editions, and suggesting new translations as necessary. This close reading, facilitated by a categorization of the various registers of "reason" (dori) apparent in the text, enabled us to in part make clear the relationship between mankind's "existence" and the structure of what we term the "World of Co-existential Kami and Buddhas." Close examination of historical materials, as well as fieldwork, allowed us to further consider Jien's way of life and his mode of understanding.

Research carried out individually by members of the group also clarifies the relationship between mankind's "existence" and "Kami and Buddhas", focusing not only on the medieval but also on the ancient and early modern periods. The results of this work are now available in a number of publications.

研究分野：倫理学・日本倫理思想史

キーワード：愚管抄 慈円 神仏共存 神仏習合 現存

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

日本の伝統的な倫理観については様々に研究されてきた。しかし、伝統的倫理観の座標軸を原理的に提示したものは数少なく、丸山真男の提言(『日本の思想』1961)にもかかわらずいまだに不十分なままに留まっている。その一因に、日本の伝統的な倫理思想が、神信仰・仏教・武士道・儒学といった、様々な領域において歴史的に現象し、しかも重層的に蓄積されてきたという特殊状況があるだろう。神信仰が最も古くから存続している思想ではあるが、文献においては最古の『古事記』ですら仏教の影響下にあり、神信仰は仏教や儒学との関係の中でしか考察できない。神信仰と仏教とは、仏教移入直後から緊張関係を保ちつつも関係を深め、本地垂迹説などの様々な「神仏共存思想」が展開し、儒学が主流となった近世においても根強い習俗としてあった。現代においても、神と仏とが共存している在りようは、日本の倫理思想の基底のみならず日本人の無自覚的な宗教的感性をも形成していることが多くの研究者から指摘されている(島田裕巳、阿磨利磨)。即ち、神仏共存思想は日本の伝統的倫理観の座標軸として最も検討に値する内容をもつと言っていいだろう。しかし、その研究は近現代の倫理学・倫理思想史研究からは看過されてきた。神道や仏教それぞれの研究はあっても、神仏の共存に関しては歴史学・民俗学などでしか研究されておらず、しかも共存現象を表面的・個別的に記述するのみで、神仏を共存させる知の様態や神仏共存世界の構造と人間の「現存」に関する倫理的・原理的な研究は数少ない。

神仏関係の歴史学的研究は、辻善之助の神仏共存に向かう歴史的図式の提示(「本地垂迹の起源について」1907)を嚆矢とする。それを受けた堀一郎や田村圓澄は共存のみならず弁別・緊張の側面からの考察を進め(田村「神仏関係の一考察」1954 など)、高取正男は排仏的「神道」の成立過程を解明した(『神道の成立』1979)。その後の研究は、辻から高取に至る“共存しつつも相互排除の緊張を孕んだ関係”という基本図式を出なかった。近年、中村生雄、山本ひろ子、佐藤弘夫、伊藤聡等による中世思想研究が進展し、改めて神仏関係の複雑さが自覚されるに至っている。

倫理学の分野では、和辻哲郎が日本の神の究極に「神聖なる無」を見て、それを仏教的「絶対空」と重ねるという“習合”理論を構築したことを嚆矢とするが、歴史的な神仏関係の考察はない。湯浅泰雄は深層心理学理論を援用して神仏習合思想を研究したが、原理的研究とは言い難い。相良亨は日本倫理思想の根源に「おのずから形而上学」という原理を見出したが、神仏に関する原理的考察は行っていない。しかし近年、佐藤正英は、事物事象そのものを「もの神」と関係しよ

うとする意識のはたらきを「たま神」という概念で原理的に捉え返し、伝統的な神・仏觀念を自己の「現存」の意味への問いに関わる基礎範疇として提示し(『日本倫理思想史』2003)、神仏共存に関する原理的研究の端緒が開かれるに至った。

(2) 本研究の位置づけ

本研究は、以上の研究の成果を踏まえた、神仏共存思想をめぐる新たな原理的・倫理的な研究として位置付く。共同研究の対象とした慈円の『愚管抄』(13世紀初頭)が描いた神仏共存理論は、単に神仏を関係づけた本地垂迹説ではない、慈円独自のものである。その独自性は、慈円が人間の「現存」の意味と救済にこだわったことに由来する。慈円は、仏教に基づく普遍的な知と世界観をもちつつ、日本という共同体の特殊性とそこに生きる人間の「現存」に目を向け、それらの救済を目指した。そこから、現在を歴史的かつ内在的に捉える独特な知が生まれ、「現存」を意味づけるための神仏共存理論と多様なレベルの「道理」概念が生み出されたと考えられる。慈円の思想は以上のように優れて倫理的であるにもかかわらず、研究は進んではいない。

本研究グループは平成22年度から2度の科研費補助金の交付を受けて、八幡信仰を手がかりとした神仏関係思想の研究、神・仏觀念それ自体の生成と展開に関する研究などを行ってきたが、それらの研究の中で、一般的な神仏関係思想とは全く異なる独自の神仏共存思想を説いた慈円の『愚管抄』の重要性が自覚されるに至った。慈円は観音や怨霊などの「冥衆」の働きを重視するが、それも含めた慈円の思想は、これまで共同研究で明らかにしてきた神・仏觀念の原型と関係が深い原理的な思想であることが予感されたのである。

2. 研究の目的

本研究グループが目指している目的は、日本の倫理思想を深層から捉え返し、日本の伝統的倫理観の原理を抽出すべく、神・仏・天などの伝統的諸超越觀念およびそれらの関係思想を人間の「現存」(個としての自己が今ここに生きる在りよう)との関係において倫理的に考察することにある。

そのために個別研究と共同研究とを並行して進める。3年間の共同研究では、武家社会へと移行しつつあった動乱期に、仏教を主軸にしながらも日本の伝統的な神觀念を独自に位置づけ、歴史の推移とそこに生きる人間の「現存」とを「道理」という概念を立てることによって解明し、日本という共同体とそこで生きる個人の救済を目指した、慈円の『愚管抄』(13世紀初頭)を研究の対象とする。そして、独自の神仏共存理論を構築した慈円の生き方と知の様態の倫理的な考察を踏まえ、慈円が『愚管抄』で描いた神仏

共存世界の構造とそこに生きる人間の「現存」とを原理的・倫理的に解明することを目的とする。

共同研究の具体的な目的は以下である。

(1) 『愚管抄』の本文の復元・索引作成：写本は8種類ほど残存しているが、最も信頼できる「島原本」も不明な点が多い。諸写本の再検討によって本文を復元し、索引作成を行う。

(2) 慈円の仏教教説・生き方・知の様態の解明：慈円の仏教教説を、神道史および最澄以来の天台教学史の中に位置づけて解明する。また慈円は撰闋家に生まれ、苦行実践、天台座主、歌人という多様な面をもつ。その生き方を『愚管抄』に結実する志向性として解明する。さらに、その教説と生き方を参照しつつ、慈円の、人間存在の時間的・空間的構造を見据え、普遍と特殊を位置づけてそれを繋げる知、および現在を歴史的かつ内在的に捉える知の様態を解明する。

(3) 『愚管抄』の思想の解明：慈円が参照したと思われる諸文献および関連が深い周辺文献（『簾中抄』、『栄花物語』などの世継物語、『平家物語』など）を読解すると共に、『愚管抄』を詳細に読解し、慈円が描こうとした神仏共存世界の構造とそこに生きる人間の「現存」を解明する。

3. 研究の方法

文献・資料の蒐集および文献読解と現地調査、および研究会を並行させて進める。

(1) 文献読解（及び資料の蒐集）

『愚管抄』の本文確定・索引作成

・すべての写本を入手し「島原本」と校合し、本文を確定する。その上で索引作成を行う。

慈円の仏教教説・知の様態・生き方の解明
・『慈円全集』の遺文・仏教関連文献を読解し、慈円の仏教教説と、仏教的普遍と日本の特殊とをつなげる独特な知の様態について考察する。

・『拾玉集』を読解し、慈円における和歌・物語的な知の特質について考察する。

・撰闋家に生まれたこと（兄である兼実との深い関係）、若い頃の苦行、隠遁志向、夢・霊告の体験、天台座主としての役割、勸学講の開催、後鳥羽上皇との関係など、多面的な志向と活動から、『愚管抄』に結実する慈円の生き方を倫理的に解明する。

『愚管抄』に影響を与えた周辺文献の読解
・『簾中抄』『栄花物語』『大鏡』『水鏡』などの世継物語を読解し、「現存」の捉え方における『愚管抄』との関連を考察する。また『平家物語』を読解し、その情念的な「現存」把握との関係を解明する。また同時代の説話や天台神道書籍などを読解し、当時までの神仏関係思想を整理し、『愚管抄』の神仏共存世

界との関連を解明する。

・『古事記』、六国史、『神皇正統記』との関係を考察し、『愚管抄』の神觀念・天皇観を際立たせる。

・四劫観・末法思想を説く『大智度論』等の仏教的時間観、および百王説など中国の讖緯説に由来する時間観を考察し、慈円の時間観・歴史観との関係を考察する。

『愚管抄』の読解

・『愚管抄』を詳細に読解し、慈円が描こうとした神仏共存世界の構造（時間的・空間的）とそこに生きる人間の「現存」の意味について考察する。具体的には、劫初劫末の道理と百王思想との関係、下降史観の意味、「観音」の利生（聖徳太子など）と日本の神々（天照大神など）との関係などを軸にして、世界の構造について考察を進める。また、人間の倫理的な努力としての「滅罪生善」「諸善奉行」などの「善」の意味を軸にして、人間の「現存」の意味を解明する。

(2) 現地調査・資料蒐集

・滋賀県大津市、比叡山延暦寺の諸堂、特に無動寺（慈円が千日入堂の苦行を達成した場所）

・滋賀県大津市、葛川明王院（慈円が荒行の末、靈験を得た場所）

・京都市東山区、青蓮院（天台座主の住坊、勸学講、熾盛光堂・大懺法院跡）

・滋賀県大津市、叡山文庫（天台教学関係の資料蒐集）

(3) 研究会

年2回開催し、個別研究の報告のほか、『愚管抄』に関して分担した作業レジュメや論考を作成し、それを持ち寄って討議する。最終年度は論文やリポジトリなどでの成果報告に向けた作業も行う。

4. 研究成果

(1) 26年度

共同研究：『愚管抄』文献読解に関しては、いくつかの写本を入手し、島原本との校合を始めた。また、岩波古典文学大系本の本文、頭注、および大隅和雄の訳（講談社学術文庫）について、研究分担者・柏木・吉田・栗原、研究代表者・上原で分担し、細かいチェックを始めた（ルビ、段落、句読点、訳・頭注の問題点など）。

現地調査に関しては、8月末に、慈円の修行地である滋賀県大津市の葛川明王院、および京都市東山区の青蓮院を調査した。

研究会は年2回開催した。8月の現地調査の際に、京都宿泊施設において調査地についての文献資料を読解した。3月末の神奈川大学での研究会においては、研究分担者・柏木の報告（『今昔物語集』天竺部における仏）を検討し、また、連携研究者・佐藤正英の『日本の思想とは何か』（筑摩書房）の「第一部 現存の根本構造」について、特にもの・た

ま 概念を中心として綿密な検討を行い、神仏関係思想の原理について議論した。

個別研究：それぞれが『愚管抄』についての分担作業を進めるとともに、次の研究を個別に行った。上原は神仏共存世界の空間的構造の解明のために、神信仰の景観から神仏習合的な景観への変遷について、特に山岳の意味に着目して考察した。柏木は、仏觀念にかかわる研究を進め、特に、生身の釈迦仏とは何か、仏の知が人間の「現存」の意味を説き明かすとはどういうことか、という問いが展開されたテキストとして『今昔物語集』天竺部を読解し、研究会で報告した。吉田は、物語化する死者という観点から、武士道書『葉隠』の読解作業を進め、また柳田國男『先祖の話』についての考察をまとめた。さらに、近代儒教のとらえ方についても概観することにより、『愚管抄』の物語性について考察するための方法論的な足場を固めた。栗原は近代以降の『愚管抄』研究を整理すべく文献を蒐集すると同時に、慈円の時間観・歴史観と中国由来の儒教教説との関係をめぐる分析作業に着手した。

(2) 27年度

『愚管抄』文献読解に関しては、岩波古典文学大系本の本文、頭注、および大隅和雄の訳（講談社学術文庫）について、上原と柏木が部分的に細かいチェックを行い、ルビ、段落、句読点、訳、頭注などの問題点を洗い出した。それを踏まえて、全員でその作業を分担し、試訳を作成した。

現地調査は、8月末に、慈円の活動拠点であり墓もある善峰寺（京都市西京区）を調査した。また慈円の修行地である江文寺跡（京都市左京区）も調査した。さらに、慈円が晩年に住み、一時期、大懺法院を移転した東山の安養寺（吉水坊跡、京都市東山区）を調査した。

研究会は2回行った。8月は京都宿泊施設において、分担していた岩波古典文学大系本の、頭注・訳、および大隅訳の問題点について報告・議論した。3月の研究会では、連携研究者・佐藤正英の『日本の思想とは何か』（筑摩書房）および執筆中の『倫理学概論』をもとに、神・仏それぞれの原理と人間の「現存」について議論した。

個別研究：それぞれが『愚管抄』についての分担作業を進めるとともに、次の研究を個別に行った。上原は天台教学における神仏関係の歴史を再検討した。柏木は、仏觀念に関する研究を継続し、日本における仏觀念の特質解明の準備として、先行仏伝テキストの載録挿話を整理した。吉田は、中近世の説話・物語文献と『愚管抄』とにおける「現存」構造の比較の土台を構築するため、謡曲・説教節・武士道書における「現存」の検討を行い成果の一部を公刊した。栗原は、近世以降の日本思想における人間の「現存」、特に武士の自意識と、それを根拠づけた儒教的「天」

觀念をめぐる考察を行った。佐藤は、『倫理学概論』の執筆を継続した。

(3) 28年度及び全期間を通じた成果の概要

共同研究：28年度は、前年度までの読解を踏まえて、『愚管抄』巻第三までの読解作業として、岩波古典文学大系など4種類の活字本での本文校合、及び現行の注釈や現代語訳の問題点・試訳を各自が持ち寄り、問題点について議論した。この成果の一部は、3年間の中間報告としてリポジトリにて公開予定である。申請時の計画とは異なり、本文全体までは完成できなかったが、それだけ本文が難解で、誤読も多く、今まで十分な読解がなされていないという状況は明らかになった。

『愚管抄』の神仏共存世界と「現存」の構造、および慈円の生き方・知の様態の解明においては、本文と周辺文献の読解を前提とした議論、及び26・27年度の実地調査の成果もあって研究を進めることができた。慈円が修行した地（葛川明王院・比叡山）や儀礼を実施した地（善峰寺・青蓮院・安養寺）などの調査で、神仏共存世界の具体的な景観を目にすることができたのは大きな成果であった。また東山の安養寺周辺の調査で、法然との場所的な繋がりなども確認できた。

神・仏・天とそれらの関係思想を人間の「現存」との関係において倫理的に考察することに関しては、3年間を通じて研究会で報告と議論を行い、研究を進めることができた。それぞれが『愚管抄』についての分担作業を進めるとともに、最終年度に行った個別研究は以下である。

個別研究：上原は、自然観の変遷を軸にした神仏共存世界と人間の「現存」の構造について考察を進め、その一部を論文として公刊した。また独特の神仏共存思想をもつ一遍の研究を進め、『愚管抄』に描かれた神仏共存思想との比較を行った。柏木は、「仏」觀念について、日本初の本格的仏伝『今昔物語集』天竺部に即し検討した。人々の「現存」の意味を解き明かす知を具えつつ、自身、現存する生身の人でもある釈迦仏の描写に基づき、院政期における仏、および人の「現存」の捉え方について考察した。成果は現在まとめつつあり、後日公表する予定である。吉田は、神仏共存思想の深層的要因の一つである靈魂観の考察を行い、論文を一本、単著の改訂版を一冊公刊した。ともに近世以降に仏教を排除しようとして矛盾を抱えた思想家を論じたものである。他に『源氏物語』に見られる神仏共存思想について考察した。栗原は、神仏共存世界と人間の「現存」をめぐる近世以降の思想史的展開に目配りすべく、近松門左衛門の人形浄瑠璃についての論考二本、および儒学・武士道を主題とした自著の文庫版を公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

栗原剛、『心中天の網島』における罪業と救済、『山口大学哲学研究』、査読無し、第24巻、2017、pp.1-19、山口大学学術機関リポジトリ「YUNOCA」にて公開、<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C070024000001>

上原雅文、「日本の自然観の変遷(その一) 原初神道における」、『人文研究』(神奈川大学人文学会)、査読無し、第190号、2016、pp.61-93

柏木寧子、「『今昔物語集』天竺部を伝として読むために 研究ノート」、『山口大学哲学研究』、査読無し、第23巻、2016、pp.41-68、

栗原剛、「武士道論の再考」、『倫理学年報』、日本倫理学会、査読無し、第65集、2016年、pp.75-86

栗原剛、「『言志四録』と『洗心洞割記』—近世後期における武士の自意識をめぐる一考察」、『日本倫理学会第66回大会報告集』、査読無し、2015、pp.62-65

吉田真樹、「日本思想における靈魂の問題」、『国士館哲学』、国士館大学哲学会、査読無し、18号、2014、pp.1-25

〔学会発表〕(計 2件)

栗原剛「『言志四録』と『洗心洞割記』—近世後期における武士の自意識をめぐる一考察」、『日本倫理学会第66回大会、2015年10月2日(熊本大学、熊本県、熊本市)

上原雅文、「神・仏観念と景観」、神奈川大学アジア研究センター公開研究会、講演、2014年7月31日(神奈川大学)

〔図書〕(計 5件)

吉田真樹、講談社、『平田篤胤 靈魂のゆくえ』、2017、321

栗原剛、近藤智彦 他、ナカニシヤ出版、『愛 - 結婚は愛のあかし? - 』(愛・性・家族の哲学 第1巻)、2016、230

吉田真樹 他、岩波書店、『哲学トレーニング2—社会を考える』、2016、208

栗原剛、講談社、『佐藤一斎 - 克己の思想』(講談社学術文庫)、2016、312

佐藤正英、筑摩書房、『日本の思想とは何か』、2014、297

〔その他〕

上原雅文、吉田真樹、柏木寧子、栗原剛、

佐藤正英、「『愚管抄』 問題点と試訳(1)」、『神奈川大学学術機関リポジトリにて公開、査読無し、2017

<http://hdl.handle.net/10487/14376>

6. 研究組織

(1)研究代表者

上原 雅文 (UERARA, Masafumi)
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号: 30330723

(2)研究分担者

柏木 寧子 (KASHIWAGI, Yasuko)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号: 00263624

吉田 真樹 (YOSHIDA, Masaki)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号: 20381733

栗原 剛 (KURIHARA, Gou)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号: 50422358

(3)連携研究者

佐藤 正英 (SATOU, Masahide)
東京大学・名誉教授
研究者番号: 90083708